

禪の唯心思想

保坂玉泉

禪宗の特色はその唯心思想なるに在り、教理行果一心を以て始終一貫してゐる。古來佛法を支那に弘傳せる人師は何れも經論を翻譯し或は之を註解し或は之を判釋し又は講述するを業とした。然るに達磨大師は尋常の如く一經一論を傳へず、又講經釋論せず、全く空手にして西來せるものの如くで、その眞意の那邊にあるかを解するもの少く、爲めに當時の人々は大師の異様な家風を目して壁觀婆羅門と稱し、習禪家に屬し、或は遂に「如何是祖師西來意」てふ公案を生ぜる程に、達磨西來の目的は不可解なる教界の問題であつた。

然るに黃檗は、祖師西來の意に就て、その『傳心法要』に達磨大師中國に到りて唯だ一心を説き、唯だ一法を傳ふ、佛を以て佛を傳へて餘佛を説かず、法を以て法を傳へて餘法を説かず、法は即ち不可説の法、佛は即ち不可取の佛、乃ち是れ本源清淨心なり」と説き、又曰く「祖師西來して唯だ心佛を傳ふ」と、又曰く「達磨西天より來つて唯だ一心法を傳へ、一切衆生本來是れ佛なりと直指す」と、江西馬祖曰く「達磨大師南天竺國より來つて中國に至り上乘一心法を傳ふ」と、祖師西來の意最も明白であつて、達磨大師は唯だ一心を傳へられたと云ふのが一致する當時の代表的意見であつた。されば河南主石頭大師はその『參同契』の冒頭に於て「竺土大仙の心、東西密に相付す」と言ひ、下つて洞山大師もその『寶

鏡三昧』の冠頭に「如是の法、佛祖密に相付す」と言はれた。大仙心とは佛心のこと、如是法と共に達磨の一心に他ならず。従上の祖師符節を合するが如く、我宗の正傳が唯一心にあることを證して餘蘊ない。佛教中本來佛弟子聲聞一派はその新聞たる佛陀の說法即ち經教を傳ふるを以てその使命としてゐたのであるが、大乘派は寧ろその經教の根本たる佛陀の人格思想を傳ふるを目的とした。中に於て一面その人格思想を文學的に表現して傳へたものと、一面人格は直接人格そのものを以て心は直接心そのものを以て傳へたものがあつた。前者は大乘敎家であり、後者は大乘禪家である。禪家に於ける傳燈の史跡を鑑みるに或は法性、或は眞如或は正法、或は道、或は心性等、師資の間印證相承せるものは何れも一心の異名に他ならぬ。故に我が宗祖大師は「佛々祖々いまだまぬかれず保任し來れば即心是佛のみなり」(即心是佛)と言はれ又「正傳し來れる心とは一心一切法一切法一心なり」と言はれた。我宗が一心を傳ふるを宗旨とする事疑ふ處が無い。

故に上代の代表的な祖師の御撰述は何れもその説く所一心の敷演であつた。傳翁の『心王銘』三祖の『信心銘』等はその名の如く一心を縦横に説き來り説き去つたものであり、六祖の『法寶壇經』永嘉の『證道歌』黃檗の『傳心法要』等は何れも心を各方面から説き、心を學得し證得し行得すべきを唱へてゐる。例へば六祖は「菩提の自性本來清淨、但だ此心を用つて直了成佛す」(壇經行由章)と説き、又「一念平直なれば即ち是れ衆生成佛す」(付囑章)と説き、又「淨名曰く直心是れ道場、直心是れ淨土」(定慧章)と言ふて、總てを唯心的に説いてゐる。

然らば此心とは何ぞや、佛と一體不二なる心、一切諸佛を統攝する眞心にして、之を禪に即心是佛と云ふ。宗祖が「所謂諸佛とは釋迦爾らは心とは何ぞや、即心是佛である一心と佛とは一體不二である。高祖の「所謂諸佛とは釋迦牟尼佛なり釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり」と云ふは、即心是佛卷の結言であるが又『修證義』の結句ともなつて、是言は我宗の佛身

觀の決擇であると同時に我宗安心の歸趣である。『即心是佛』の卷に「西天には即心是佛なし、震旦にはじめてきけり」とあり、即心是佛の思想は西天より佛祖正傳せる所なるも、其言は西天に之なく、支那に始まつたとの謂であらう。然り、支那に至り禪の盛行となるや諸祖符合して此言をなした。二祖が三祖に示せる語に「是心是佛」とあり。傳大士は『心王銘』に「是心是佛、是佛是心、念々佛心、佛心念佛」、或は「即心即佛、即佛即心」と云ひ、河南主石頭にも「即心即佛」の語あり、江西主馬祖にも「汝等諸人各自心是佛を信ぜよ、此心即ち佛なり」とあり。此の如く即心是佛の言説は早く南方に行はれた。即心是佛の卷に『景德傳燈錄』卷二十八を引き「大唐國大證國師慧忠和尚僧に問ふ、何れの方より來る、僧曰く南方より來る、師曰く南方何の知識かある、僧曰く知識頗る多し、師曰く如何が人に示す、僧曰く彼の方の知識直下學人に即心是佛と示す」と云ふ。又馬祖即心是佛を唱へ門下に盛行したらしい。『那一寶』に「西天二十八祖にも顯説なし、三祖始て三祖に示して曰く、是心是佛、是心是法、法佛無二、僧寶も亦然りと、而して馬祖下より此商量多く聞えり」とある。

然るに此の即心是佛の言を誤るものが多いので、高祖は「江西馬祖は即心是佛と道ふ、即心是佛と道ふと雖も、是れ心猿意馬即佛とは道はず」(永平廣錄卷五)と示された、心猿意馬とは吾等凡夫に念々起る所の妄心に外ならぬ。又「學者おほくあやまるによりて、將錯就錯せず、將錯就錯せざるゆゑに、おほく外道に零落す、いはゆる即心の話をききて、癡人おもはくは、衆生の慮知念覺の未發菩提心なるをすなはち佛とすとおもへり、これはかつて正師にあはざるによりてなり」(即心是佛卷)と誡められた。此即心是佛の言を誤解したならば外道の邪信に墮する。故に高祖は更に即心是佛卷に先尼外道の我見と支那南方の心常相滅の謬見とを擧げて即心即佛の眞義を反顯された。

先尼外道の見は『涅槃經』南本第三十六、北本第三十九橋陳如品に出てゐるが、その執する眞我は人々の身中に常住する靈知にして、冷暖を自知し痛癢を覺知し、永久に不滅にして、身破れ境滅するも決して生滅に涉らず、身相破滅すれば獨り遊離して諸處に徧在すと云ふもので、云はゞ肉體的物質的の條件の拘束を受けざる存在即ち眞我或は靈知を心と云ふ。先尼外道の見は所謂心常相滅の見、身心各別の見で佛教の正義に反するもので、従つてかゝる眞我靈知を禪の一心としてこれを即心是佛と認むるが如きは斷じて許さざるところである。

外道の見より更に劣れるは妄心即佛の見である。妄心とは吾人の現在作用しつゝある感覺意識、煩惱妄想の心のこと、此心その儘を認めて佛と云ひ、これを即心是佛とするが如きは又更に大なる謬である。若し現在の妄心をその儘佛心なりとするならば信解行證の必要を認めず、所謂破れ大乘、誇大妄想となる。高祖も「みだりにわれは佛なりとのみおもひいふは、おほいなるあやまりなり、ふかきとがなるべし、學者まづすべからく佛はいかなるべしとならふべきなり」(四禪比丘)と示され、自我即佛、妄心即佛の謬想を誡められた。

心佛一如なる心は更に世界と一體である。六祖大師は「心量廣大にして法界に周徧す」と云ひ、『傳心法要』には「此一心の法體の虚空を盡し法界に徧きを名けて諸佛と爲す」、又曰く「佛の眞法身は猶ほし虚空の如し」とあり、『信心銘』には「圓なること太虚に同じく、缺くる無く餘る無し」とあり、我宗祖大師は最も明白に且つ適切に「この三千大千世界は如來全身なり」(如來全身卷)「佛心はこれ三世なり」(後心不可得卷)「三界唯心は全如來の全現成なり」(三界唯心卷)等と示された。是等諸文は何れも同工異曲、之れを合考すれば、『華嚴』に所謂心佛及衆生是三無差別の説と全く同一であつて、一心と云ひ、佛と云ひ、衆生と云ふは本質的に異つたものでないのである。

斯く心と云ひ佛と云ふは世界と一體、三世と不二なる絶對存在者なれば、一切の相對的觀念を以て寫象することは出来ぬ。是を以て『壇經』には「心量廣大なること猶ほし虚空の如く邊畔あること無く、亦方圓大小なく、亦青黃赤白に非ず、亦た上下長短無く、亦臆なく、喜なく、是無く非無く、善無く惡無し……自性能く萬法を含む……心は虚空の如し、之れを名付けて大（摩訶）と爲す」（般若第二）とあり。此絶對一心の中には方圓大小是非善惡等一切相對界をその内容としてゐる。世界と一體なる心は同時に萬物衆生と一體であつて且つその造化創造の源本である楊岐山甄叔禪師は「群靈の源假りに名けて佛と爲す」と云ひ、大慧宗杲も、「群靈の源假りに名づけて佛と爲す、一源の中無量無邊不可說不可說の差別の異旨を具ふ、能卷能舒して萬物を造化す」と云ふてゐる。佛は群靈即ち一切生命の根源である、一切生命は如來の生命から分化したもので、佛は造物主である、創造主であると云ふ。且かも如來の造化は神の如く萬物を工作的に創造せるにあらず、佛身を卷舒し佛身を分化して衆生を造る、所謂自己創造である。生命の創造は自己創造である。如來は生命あるが故に自己創造に依りて一切衆生身を造るのである。されば如來は一切衆生の親であり、一切衆生は佛の子である。南本『涅槃經』長壽品に明かに此意を説いて、「一切人中天上地及び虚空の壽命の大河は悉く如來の壽命海中に入る、是故に如來の壽命は無量なり。復次に……譬へば阿耨達地は四大河を出す、如來も亦爾なり、一切の命を出す」とある。佛と衆生と不二一體なる旨明かである。中峰明本禪師は此の心佛及衆生是三無差別一體なる心を神光と名づけ、その本體論的創造的方面を能く道破してゐる、「神光獨り耀く……獨り耀くと言ふは乃ち一體にして二無き也、神か光か、天に在つては天に同じく、地に在つては地に同じく、虚にして萬象を含み、洞にして十方を貫く……神光は天より生ずるに非ず、地より湧くに非ず、内より出づるに非ず、外より來るに非ず、造化之れに依つて轉旋し、物象之れに由つて生植す、

能く一切を成就するも、而かも一切の成就すること能はざる者は神光なり」と。此の神光は宇宙の本體最高第一義諦の實在であつて、唯一、獨尊、統攝、普徧、造化等の諸徳を具備せりとし、佛心を完全に説き去つてゐる。

吾人の修行の階梯を假りに信解行證とすれば、我宗の宗意は此佛心を信解行證するにあり、詳しく云へば信とは佛心を信じて毫も疑はざる不動なる信念であり、解とは佛心の體相用一切の諸徳を觀察して誤らざる知解であり、行とは佛心を以て心とし佛行を以て行となし如何なる場合にも此行を移さざるもの、證とは佛心の體験證得して不動なるものである。

而して信解行證を行の一法に究盡するのが我が宗の一行三昧である、且つ一行三昧とは坐禪これであつて佛心の信解行證は悉く坐禪の上に現成するのである。六祖大師は「一行三昧は一切處に於て行住坐臥常に一直心を行ずる是れ也」(定慧章)と説き、「若し一切處に於て行住坐臥純一直心にして道場を動ぜず、直に淨土を成ず、此を一行三昧と名く」(付囑章)と言ふて、一切時一切處に佛心を行じて不退轉なれば、その境地が直に作佛であり行佛であり、又淨土である。一體坐禪とは身心不動なる状態である。身心不動とは前來述ぶる所の唯一心に安住して如何なる場合にも此一心を捨てざるの謂である。人動もすれば時と處とに依つて節を變へ、主義を曲げること往々である。人は人に依つて動かされる、人の毀譽褒貶、即ち或は威喝に依り或は甘言に依つて動かされることがある。又權力に左右せられ、金錢に買収せられる。又境遇の變化、例へば逆境に遇ふては逆境に順境に値ふては順境に心動かさる。然るに是等の場合坦々として少しも動せず、何物の力を以てもその主義信仰の奪ふべからざる不動如須彌山の状態に至る、是れ一心信仰に安住不動なる禪の力である。之を行三昧と云ふ。而して更に死生の境に出入しても尚ほそのために動ぜざるに至つて一行三昧は究竟する。禪は實に「心の信解行證であつて、禪の唯心的なる所以である。